# 夕焼けに散る花

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕焼けに散る花

【Ｎコード】
Ｎ３７２３Ｆ

【作者名】
たけ１００００５

【あらすじ】
基本的に流派とかも一部オリジナルです。フィクションです。今作のテーマは殺陣です。あとは、なぜ戦うのか。剣の道とは？戦闘描写の袈裟切りとかは、最初に解説しますが、あらすじだけ読んでもわかります。戦いの部分だけ本編読んで、興味ないところはあらすじを読んで、純粋に戦いを愉しむ手もあります。では、ごゆるりと和の心をもってお読みくださいませ。なお、連載モノですが、文が長くてやめたい時は、そのページをお気に入りに登録して、次回そこからお読みいただければ、しおり機能のように使えます。

# 1兵法

地面に紅い何かが三つ……その上には、物が置かれている。それは徐々に輪郭を帯び、人間だとわかる。血……溜まり？

「はっ！？　……目覚め悪っ！　」

彰は頭をバリバリかくと、目をこすって寝室から洗面台に向かう。

「今日から新学期か。。。」

和風の、こころばかり広い廊下を歩いていると、父が現れる。

「おい、彰。顔洗ったら、これから道場に来い」

「りょ～かい。昨日言われたことくらい覚えてる」

今日は、いつものように自宅兼白河陰流剣術道場での朝練のはずだった。

しかし、高校に進学したと同時に、白河陰流の秘奥義”迅雷突”の奥義書の伝授権を賭けた一本勝負を師範であり父の白河亮から申し込まれた。

白河陰流とは一般には知られていないが、愛州陰流の創設者である愛州移香斎久忠（あいすいかせひさただ）から正式に免許皆伝を受けた、白河謙信忠政（しらかわけんしんただまさ）が愛州陰流に手を加えて開いた流派だ。

愛州陰流は、江戸時代将軍の指南役を任されていた超一流の流派だ。

白河陰流が一般に知られていない理由は気功術を使えることを前提にしてあるからだ。気功術は厳しい鍛錬により会得でき、運動能力の上昇、治癒能力などがあるが、治癒能力は一部の人のみが使え、ほかにも隠された力を持つといわれているが、その存在すらほとんどの人に知られていない。ゆえに、知られればイレギュラーな存在と扱われるため、誰も公言しないことがそれに拍車をかけている。

もちろん願ってもないチャンスだが、いくら高校に上がってひとつの節目を迎えたとはいえ、いくらなんでも急すぎる。

……何をたくらんでいるんだ、親父は……。

道場は、先代から使っている古い建物だ。木造築五十年。瓦の屋根からたまに水漏れして、先日修理したのだが、そもそもここの流派は常人では習得できないために普通の剣道道場もやっているのだが、住所が田舎なこともあって門下生があまりいない。そのため、修理代もあまり出ないし、いい加減個人的施設として使って本職を変えなければと家族で話している状態だ。

「待たせたな彰、さて始めるか。まずは基本のおさらいな」

いいよ、と言う彰をたしなめ、淡々と語る亮。

「まずは体勢からだな。刀を抜くときにとる臨戦体勢が”自然体”刀を構えるとき、攻撃される部位を半減させ、より速く攻撃できるようにセッティングされた体勢が”半身”で、右半身が右足を、左半身は左足を前に出し、体を斜めにして構える」

「次は五行の構えだ。上段の構えは、刀を頭上に構える。攻撃に適した上段の構えは”名人の位”とされている。

相手の責めに動じない気位で相手を圧倒させる攻撃的な構えで、別名”天の構え”または”火の構え”という」

「八相の構えは、諸手左上段の構えから左半身になる。これは相手の首や肩を直ちに打つのが常法だが、八ヶ所を同時に撃つことができる構えとも伝えられる。さらに、自分より先に技を出さないで相手を監視し、その出方によって攻撃に変えるのが最良の手段といわれるが、打ち込みの迅さに自信がなければできない。別名”陰の構え”または”木の構え”（大木が天を突き刺す偉容の例え）という」

「中段の構えはその名の通り、腹部あたりで柄を握る。攻防自在の構え”常の構え”ともいわれる」

「下段の構えは、剣尖を相手の膝頭の下、約五～六センチのところにつける、守りの構えであり、気意は水の心、すなわち冷静で澱まず、己を守り、いかなる動きにも応じられる構えであり、”地の構え”または”土の構え”という」

「最後は脇構えだ。左半身となり、刀身が相手から見えないように構える。それにより、自分の武器を知られないように構え、出方に応じて刀を長く、あるいは短く使えるようにする構えで、”陽の構え”とも言われ、脇下を狙い打つのが定法で、強い攻撃的な構えで、別名”金の構え”懐に黄金を秘め、必要に応じて使うという意味だ」

「攻撃は八双の構えから振り下ろす袈裟、その逆の逆袈裟、横一文字、面を狙った斜め面などがあるが、斬った、もしくは敵の攻撃を防いだときに使うことが多い」

「刀身には直刃と乱刃がある」

知っての通り、気功術師同士の戦いとはいわば心の読み合い。それが剣でも銃弾でも、一挙一動を判断する”心の速度”を鍛え上げることが重要だ。音速程度ならよけられる。撃墜できる。それが気功術だ。

道場は、先代から使っている古い建物だ。木造築五十年。瓦の屋根からたまに水漏れして、先日修理したのだが、そもそもここの流派は常人では習得できないために普通の剣道道場もやっているのだが、住所が田舎なこともあって門下生があまりいない。そのため、修理代もあまり出ないし、いい加減個人的施設として使って本職を変えなければと家族で話している状態だ。

「待たせたな彰、さて始めるか。まずは基本のおさらいな」

いいよ、と言う彰をたしなめ、淡々と語る亮。

「まずは体勢からだな。刀を抜くときにとる臨戦体勢が”自然体”刀を構えるとき、攻撃される部位を半減させ、より速く攻撃できる

ようにセッティングされた体勢が”半身”で、右半身が右足を、左半身は左足を前に出し、体を斜めにして構える」

「次は五行の構えだ。上段の構えは、刀を頭上に構える。攻撃に適した上段の構えは”名人の位”とされている。

相手の責めに動じない気位で相手を圧倒させる攻撃的な構えで、別名”天の構え”または”火の構え”という」

「八相の構えは、諸手左上段の構えから左半身になる。これは相手の首や肩を直ちに打つのが常法だが、八ヶ所を同時に撃つことができる構えとも伝えられる。さらに、自分より先に技を出さないで相手を監視し、その出方によって攻撃に変えるのが最良の手段といわれるが、打ち込みの迅さに自信がなければできない。別名”陰の構え”または”木の構え”（大木が天を突き刺す偉容の例え）という」

「中段の構えはその名の通り、腹部あたりで柄を握る。攻防自在の構え”常の構え”ともいわれる」

「下段の構えは、剣尖を相手の膝頭の下、約五～六センチのところにつける、守りの構えであり、気意は水の心、すなわち冷静で澱まず、己を守り、いかなる動きにも応じられる構えであり、”地の構え”または”土の構え”という」

「最後は脇構えだ。左半身となり、刀身が相手から見えないように構える。それにより、自分の武器を知られないように構え、出方に応じて刀を長く、あるいは短く使えるようにする構えで、”陽の構え”とも言われ、脇下を狙い打つのが定法で、強い攻撃的な構えで、別名”金の構え”懐に黄金を秘め、必要に応じて使うという意味だ」

「攻撃は八双の構えから振り下ろす袈裟、その逆の逆袈裟、横一文字、面を狙った斜め面などがあるが、斬った、もしくは敵の攻撃を防いだときに使うことが多い」

「刀身には直刃と乱刃がある」

知っての通り、気功術師同士の戦いとはいわば心の読み合い。それが剣でも銃弾でも、一挙一動を判断する”心の速度”を鍛え上げることが重要だ。音速程度ならよけられる。撃墜できる。それが

気功術だ。

## 2奥義書（前書き）

攻撃される部位を半減させ、より速く攻撃できるようにセッティングされた体勢が”半身”。上段の構えは攻撃に適した構え。脇構えは強い攻撃的な構え。八双の構えは相手の首や肩を直ちに打つ。その出方によって攻撃に変えるのが最良の手段陰の構え。中段の構えは攻防自在の構え。下段の構えは防御の構え。攻撃は八双の構えから振り下ろす袈裟、その逆の逆袈裟、横一文字、面を狙った斜め面などがある。

気功術師同士の戦いとはいわば心の読み合い。音速程度ならよけられる。撃墜できる。それが気功術だ。

## 2奥義書

「ではそろそろはじめるか、模擬刀を使え。竹刀ではすべての技は出せないからな。
当然気功術を併用するわけだが、いつでも気を練る時間を取れるわけではない。準備時間は取らない。質問はあるか？　」
　彰は当然の疑問を口にした。
「なぜいきなりこんなことを言い出した？　何かたくらんでるんじゃないだろうな」
　亮はやれやれ、といった表情で肩をすくめる。
「試合に勝ったら教えてやらんでもないぞ？　」
　「いつまでも子供だと思うなよ」
「だから試合を申し込んだんだがな……」
　亮は彰に聞こえないぐらい小さな声でつぶやいた。
「あ？何か言ったか？　」
「なんでもない、そろそろはじめるぞ」
　亮は中段の構えでこちらの反応をうかがっている。
　彰は八双の構えで駆け出す。
　その間に丹田から気を循環させ、相手の動きに対応できるよう脚力から上昇させる。
　ただ駆け出すという動作一つとっても、その瞬発のタイミングと重心の移動だけで根底から違う。
　ふとももを、膝を、腰を稼働させる腱と筋と血流のリズム。それら全てを把握し、同調させることにより、人体の運動能力についての常識さえ覆す。それが気功術”速歩”
　軽きをもって重きを制す。軽きをもって速きを制す。これが気功術の理念だ。
　　すかさず亮は体を反転させ、彰の胴を狙い攻撃する。
　しかし、攻撃をよんでいる彰はいったん後退する。

亮はさらに踏み込み、刀身を反転させ、二太刀目を逆袈裟に浴びせる。
これにはさすがに対応しきれず、受け止めつつ体制を整え、左に踏み込み袈裟切りを仕掛ける。
だがこれも亮は読んでいるらしく、冷笑を浮かべながらこれを受け止める。
すかさず亮は袈裟切りを仕掛ける。
彰は鋒に左掌を当て、刀身を受け止める。
当然、このままでは終わらないだろう。
そう思った彰はすかさず中段の構えに転じようとした刹那、亮は彰の上空を飛び、背後に回った。
あまりに急な動きに焦りながらも、刀を横一文字に振るう。
亮は袈裟切りの起動を変え、刀身を受け止める。だが不意にその重さは消えた。
彰は刀身を引き下段の構えに転じると同時に左に踏み込み、逆袈裟に切りかかる。
「ちいっ！」
反応速度は恐ろしいほど速いが、間合いが詰まっているこの状況では間に合わない。
払い落とすように刀を振りつつ飛び退いた亮は姿勢が崩れ、次の攻撃には対応しきれない。
そこを見逃す彰ではなかった。振り払われた刀身は時計回りに弧を描き、がら空きの面を斜め面に斬る。
陰流の極意は”転”にある。己の心身と太刀を円球と化し、敵の動きに応じ、一太刀目は相手を崩し、二太刀目以降から勝負に出る。
もちろんこれには”見切り”が必要になる。
これを会得するには相当な技量が要る。彰は気功術で能力を上げているだけではなく、剣士としても類まれなる才能があるということだ。

彰はそれを見事証明し、白河陰流にて勝負を勝ち取ったのである。
彰は、血抜きの動作が好き…というか癖だ。必ず刀を左上から右下に振る。改めて勝ちを感じ、内心小躍りする。
「見事だ、彰。これなら秘奥義を会得できるかも知れん。少し待っていろ」
そう言うと、道場から出て行き、少し経ってから奥義書を持ってきた。
亮は早速説明する。
「”迅雷突”は無の境地をもって、初めて出せる絶技だ。技の全てを駆使し、彰は亮に勝利し、迅雷突の奥義書を受け取る。
それは、未だ完成しておらず、修めた者はいないと聞く。もちろん俺は一度も見たことはないが、その速さは何者も捕らえることができないと聞く。精進しろよ」
彰はその重みを確かめるように受け取る。
「無の境地…ああ、きっと会得してみせる。ところで、なぜこれを渡す気になったんだ？」
「ああ、そうだったな……だがそろそろ学校だ、帰ってきたら話す。まあ、そのころには知らされているかもしれないが」
「？　まあいいか、それじゃ行って来る」
こうして彰は心新たに新しい学校に通うのだった。

## 3新学期と兆候と（前書き）

彰は亮に見事勝ち、奥義書を得る。順風満帆な新学期に向けて元気に登校する。

## 3新学期と兆候と

学校は電車で十五分のところにある。駅まで三十分くらいかかり、学校は駅から五分くらいであるから、計五十分ほどだ。

鉄筋コンクリートの建物で、築二十年くらいである。クラスは四クラス。

山に囲まれた平地にたっている。この街は結構彰にとってはお気に入りの街なので、これからの高校生活はとても期待しているものだった。

（ついに俺も高校生か、奥義書も受け取ったし、怖いくらいに調子がいいな。

あれ？　一番前の窓際の席にいる娘は天野香澄さんじゃないか？同じ学校にきてたのか）

天野家と白河家は昔から親交が深かった。同じ気功術を使えることが主な理由だ。

彼女は治癒の力を持っている。気功術は修行さえ積めばほとんどの人間がつかえるが、治癒の力は一部の一族しか使えないといわれている。さらにその一族はほかにも力があるらしい。

すると、彰の視線に気づいたのか、振り向くと、天野が近づいてきた。

「おはようございます、白河さん」

「あ、ああ、おはよう……」

彰は思わぬ事態に動揺した。

今までこちらから話し掛けたことはあっても、向こうから話し掛けるなど皆無に等しかったからだ。しかもわざわざ席から立って来た。

（そういえば、中学校にいたころ、俺の行く高校を聞いてきたことがあったな。もしかして同じ高校に行く気じゃないかと、近くで聞いていた友達が言っていたことがある。

もちろん本人は気にもとめず、そのまま何事もなかったように疑惑は消えたが。まさかな、そんなこと天野さんに限ってあるわけないか。）

「今日おじさんからお話は聞きましか？　」

天野の口から突然亮の話が出てきて彰はさらに困惑した。

「え？　ああ、なぜか突然奥義書を賭けた一本勝負を申し込まれて、勝った。帰ったら話があるって言われたけど……」

「そうですか、それならいいです」

そう言うと、天野はとてとてと席に戻ってしまった。

（なんなんだ、いったい……）

天野は、幼少のころからまわりの人間に化け物扱いされていた。

気功術を使えることは隠せても、治癒の力は自分が怪我をしたときに、自然に発動してしまうため、怪我をしてもその場ですぐに治ってしまうからだ。もちろん他人の傷を癒すこともできる。

（ここではばれなければいいんだが、天野さんを知っているやつがばらすかもしれないな……）

すべての授業が終わり、ＨＲが始まった。

（これが終わったら早速帰って話を聞こう）

（！？　くっ……めまい……？　いやもっと不鮮明な違和感が……）

「これは……妖気？　でもそんな……いくらなんでも急すぎる……！？　まさか……！　」

ガタンッ

みんながいっせいに天野のほうを向く。

天野は何かぼそぼそと言った後、今にも飛びつかんばかりの形相でこちらをにらんできた。

いったい今日で何回目だろうか？　いつもはめったに見る事のないことばかりが起こって、何かあるのではないかと始めて考え始めたが、天野の突然の叫び声でその考えを中断させた。

「白河さん、今の感じましたね！？　お願いです、私と一緒に

早く守門神社まできてください！」
「え……けど今ＨＲだからすぐにかえれるだろ？　あそこまで、どんなに急いだって一時間はかかるし、バスや電車はほとんどない……」
「今すぐなら間に合うかもしれません、私はもう行きます。早く来て下さい！」
　そう言うと、いきなり窓に足をかけ、飛び降りた。
　教室にいる人は、みな窓に身を乗り出してあっけにとられている。
　天野は初日早々に気功術を使い、さっさと走っていってしまった。
（俺も気功術が使えることがばれてしまうとはいえ、明らかに様子がおかしいし、このまま一人にするわけにはいかないよな……？）
　彰は同じように飛び降りて後を追った。
　彰は突然のことに動揺しつつ、天野に聞く。
「いったいどうした？　こんなに急いで、ちゃんと説明してくれ」
「……さっき、めまいが……起こりませんでしたしたか？」
　天野は息も絶え絶えに、必死に走っている。というより、障害物が多すぎるので屋根の上を飛んでいて、やっと道が開けてきたところだが。
「ああ、急にめまいがした後、天野さんが立ち上がったんだ」
　「それが、妖気なんです。慣れれば、違和感を感じる程度ですが。今年は、封印が一番弱まる年なんです。なんでも、愛州陰流の使い手が妖怪になったと」
「愛州陰流だと！？」
　天野はうつむきながらうなずく。
「はい……」
　それはつまり、封印している柳生飛騨守宗冬宗厳の怨念が解き放たれ、守部である天野の両親が危ないということになる。
「そうだったのか、急ごう、天野さん！」
「はい！」

## 4殺戮（前書き）

彰は天野香澄と高校で同じクラスと知る。もうじき放課後のタイミングで妖気を感じ、ふたりはその場所に向かう

## 4 殺戮

そして10分後、守門神社の近くまでやってきて最初に変化に気がついたのは、感覚が変わったこと。

「何か、感じます！」

「確かに……しかし、敵は近い。一気にいくぞ」

「はい！」

そして、目に付いたのは、封印の祠（ほこら）に続く小屋が壊れて、そこらじゅうに飛び散っている血と二つの血溜まりだった。

それ以外はあまり戦った後がない。反抗せずに殺された感じだ。

天野は、二つの影に駆け寄り叫ぶ。

「お父様、お母様！」

天野がむかった先には、女を守るように覆い被さった男の姿があった。

そこから少し離れたところには、今朝話をしたそこにいるはずのない人間が、変わり果てた姿で横たわっていた。

「お、親父？」

そう言うと、亮の体がぴくりと動いた。それを確認すると同時に彰は亮を抱き起こした。

「親父、しっかりしろ、親父！」

すると、不意に二人に影が差し、顔を上げる。天野だ。

「天野さん、親父が……」

「わかってます。すぐに治しますから」

すると亮の体が暖かい光に包まれる。だがすぐに消えてしまった。

天野は、意外な事態に対応できずにつぶやく。

「そ、そんな……どうして？」

天野は一生懸命気を送ろうとするが、何も起こらない。そして亮の目が開いた。

「無駄だ……おそらく、妖術か何かだろう、みんな……気を使うことができなくなってやられた。あの力を、使えないようにできれば……気を込めた一撃で倒せるのだが……」
「これもやつの仕業なのか？　どこに行きやがった！　」
「わからん。それに、今のおまえでは、やつには……勝てない。あの力を……封じなければ……」
「もうしゃべるな！　」
「やつは、天野家の持つ力を……恐れ、家中を探していた……香澄ちゃんを……守ってやってくれ……この……刀で……」
そう言うと、仕込み刀と太刀をつかみ、差し出そうとする。だが、受け取る前に亮は刀を落とし、そのまま動かなくなった。
「親父？　しっかりしてくれ、親父！　」
「お、おじさん、目を開けて、おじさーん！　……お父様も、お母様もみんな……みんな……」
天野は放心状態でその場で座り込んでいる。
「へっへっへ、飛騨守様が仰ったとうり、のこのこと殺されにやって来たガキが二匹もいるぜ。天野家は全員殺さなければならない。おまえらはこの斧の錆にしてやるぜ」
振り向くと、二メートルはありそうな斧を持った大男がいた。
「貴様が……三人を殺したのか……」
「そうだ、俺たちが封印を弱める術を使ったんだ。俺を殺せば気は使える。ここまで安全に来れたのは、一時的に気を使えるようにしたからだ。飛騨守様の力を借りて、冥界への扉を開き、この世を混沌に満ちた世界に変えてすべてを破壊してやるんだ！　」
「そんなことのために、みんなを……絶対にゆるさねえ！　」
「許さないならどうするんだ？　俺は飛騨守様に力をもらった。おまえなど、血祭りに上げてくれるわ！　この……ギャア！　」
敵の言葉をさえぎり、彰は渾身の一撃を肩から袈裟に切る。
「名前ぐらい名乗らせ……があっ！　気があふれ出してる！？　妖術が半減しただと！？　」

「ごちゃごちゃうるせえ！　死ねー！　」
　彰は目にもとまらぬ速さで敵の四肢を切り刻み、胴を滅多切りにする。
　腸が飛び出て、
　ベキベキと肋骨がへし折れ、
　臓という臓が切り刻まれ、
　頭蓋骨を叩き割り、
　脳漿が散乱し、
　目玉が飛び出る。
　敵はなすすべもなく絶命するが彰の手は止まらない。
「貴様らさえいなければ、貴様らさえ……」
　もはや肉塊と化した物体に今もなお切りかかり、彰は返り血で真っ赤に染まり、その姿はこの世のものとは思えない、まさに鬼神のそれだった。
　「もうやめてー！　」
　その様子を呆然と見ていた天野が目に涙を浮かべ力いっぱいに叫んでいた。
　だが、彼にはもはや何者の声も届かない。ただ、目の前にある憎き敵を滅することのみに取り付かれた鬼神なのだから。
　にもかかわらず、天野は駆け出した。その一方的な虐殺が行われている所へ。
　彰が刀を振り下ろしたときだった。天野が彰の前に立ち、手をつかみ、止めようとするが、勢いに乗った刀は減速するものの肩を切り裂き、鎖骨にぶつかったところでようやく止る。
「うっ」
　天野は悲痛の叫びを上げる
「あ、天野さん……？　な、なぜ……」
　「もう止めてください。この人を殺しても、お父様もお母様もおじさんも生き返るわけではありません。人は人を裁くことなんてできないんです。憎しみは新たな憎しみを生み、死の螺旋が繰り返

されるだけです。だから……だからもう、元の白河さんに戻ってください……！」

天野が手を離す。彰は膝の力が抜け、膝が地につくと同時に支えを失った刀が落ち、彰の足をわずかに斬る。

だが、痛みは感じない。彰は止めに入った天野さんを斬ってしまった。刀を通して筋肉をブチブチと斬る感触がよみがえる。骨に当たり、刀が震えたのは自分の手が震えていたからだろうか？一陣の風が吹く。

しかし、血の匂いは彰の体に染み付き、消えない。身体じゅうに粘性のある血液がこぶりつき、滴り落ちる血も名残を惜しむようにゆっくり身体をつたって落ちていく。

（俺は人を殺してしまった。この手で……肉を斬り、骨を叩き割って……）

「俺は……俺は……うわぁぁぁぁぁぁー！！！」

彰はその場で泣き崩れた。父親を殺し、天野の両親を殺した憎き敵と同じように人を殺してしまった。

（オレハ……サツジンキダ……）

## 5 襲撃（前書き）

亮と天野の両親は殺された。
手下の一人は倒したが、二人は深い絶望の淵にたたされた。

## 5 襲撃

彰の家に到着した二人は、早速作戦会議を始める。
夜はこのあたりは誰もいないので、真っ暗だが、二人以外誰もいないと、静寂さもまたいっそう深まる。
「作戦会議の前に聞きたいんだけど、今回の事件のことはある程度予測できたことなんだよな」
「はい、今朝天野さんにおじさんのことについて聞いたことも、そのことについてどこまで知っているか確認したかったからなんです」
これで今朝の天野のおかしな言動の理由がすべてわかった。
つまり天野は、彰と連絡がとりやすいように同じ学校に通って、今後のことに付いて話そうとしていた矢先に最も恐れていたことが現実になってしまい、後先考えずに彰を神社に連れて行ったというわけだ。
「そうだったのか……なら天野さんは親父が何を言おうとしたかわかるのか？」
「はい、だいたいは分かります。封印のことについては、私の両親がもしものときは協力してくれるように頼んであったので。おじさんはもし封印が解けても対抗できるように、奥義書を白河さんに渡してともに戦おうと考えていたのでしょう。この話を持ち込んだときにはすでにあなたは剣術に夢中だったから、わざわざプレッシャーを与えないように黙っていて、今日話す予定だったのだと思います」
亮がいきなり試合を申し込んだのは彰の技量を確認するためだったのだろう。彰が理由を聞いてはぐらかしたのは単に彰をからかっていただけではなっかようだ。
もし、試合に負けていたら一人で戦うつもりだったんだろう、そう思うと彰は歯噛みした。封印が解けた日がもっと遅ければ助けられたかもしれない。

「悔やむことはありません、強いものが生き残る世界ですから」
天野は彰の心を読んでいるかのように、しかし冷静な口調で言った。自分の両親が殺されたとは思えないほどに。
「天野さんは強いんだな……あんなことがあったのに」
彰は落胆と、もうここまで落ち着いている天野にわずかな怒気を込めて呟いた。
「済んだ事をいつまでも悔やんでも仕方ありませんから」
天野はやや俯きつつしれっとした態度で答えた。
「そうだな、とりあえず今後どうするかを決めよう」
彰は、自分に言い聞かせるように言った。
「しかし天野さんとはあまり話さなかったのによく考えていることが分かったな」
「おじさんがよくあなたのことを話していましたから」
「親父が？　どうせろくな事言ってないだろ」
天野は珍しく微笑みながら言った。
「そんなことないですよ、『彰には才能がある』と、何度も言いながら自慢するように話していました。あなたの前では口が裂けてもそんなことは言いませんでしたけど」
「親父がそんなことを……」
彰は、自分のことを誉めないで、むしろからかうように接していたときのことを思い出しながら、少しだけうれしくなって笑みがこぼれた。
「おじさんは、とてもやさしくていい人でした。おじさんの無念を晴らすためにも頑張りましょう」
「ああ、話を戻すけど、いつ敵が襲ってくるか分からないから、できる限り二人いっしょにいたほうがいいだろう。特に寝込みを襲われたらひとたまりもない。交代で寝て必ず一人は起きているほうがいい」
「わかりました。そうそう、一応私も、護身術程度ですが合気道を習ったので、全ての敵から守ってくれなくても恐らく大丈夫で

すから」
彰は始めて聞く話で少し驚いた。
「合気道？　どのくらい出来るの？　」
「二段です」
「は？　」
天野はしれっと答えるが、彰は意外な答えに間抜けな声を出してしまった。
「二段ですけど……お役に立てませんか？　」
（い、いや、むしろ怖い……）
「い、いや、それで気功術も使えるんだから十分平気なんじゃ……？　」
彰は安堵と驚きで拍子抜けしていた。
しかし天野は不安げに呟く
「相手は術で強化した人間や動物を使ってくるかもしれません。油断しないで下さい」
確かにその通りだ。だがそれは、多くの関係のない命を奪わざるをえなくなる可能性があるということだ。
自分たちの命のことだけを考えて行動するのは出来なくなり、危険が増す可能性がより大きくなった。
「白河さん、明日の行動についてですが」
天野は彰の思考を断つように呼ぶ。それに反応した彰が顔を上げるのを確認すると天野は続ける。
天野は、一つの提案をする。
「敵の術を封じる手は、図書館などで過去に同じような事件がないか調べれば、糸口がつかめるかもしれません」
「それはいい案だ、明日から隣町の図書館で調べてみよう、あんなことがあったんだ、学校は少し休んでも問題はないだろう」
「敵は私を探しているようなので、おそらく術を封じる手は法術かそれを補う道具がカギを握っていると思います」
神社に残っていた奴は確かにこう言った『天野家は全員殺さ

なければならない』ならば調べる部分は絞られていく。
「なら法術に関することや古事記などの伝承から気を使えなくする技に打ち勝った話などをたどればいいわけか」
「おそらくは」
「よし、これで決まりだ。明日から忙しくなる、天野さんから休んでくれ、俺は近くにいて周りに気を配る何が起こるかわからないからな」
「分かりました。それではよろしくお願いします」
「ああ、この部屋に布団があるからそれで休むといい。俺は天野さんの横にいる」
「？　横……ですか？　」
「ああ、どこから敵が来るかわからないからな」
彰は確信めいた目で天野を見る。天野は一瞬俯くが、すぐに彰を見て頷く。
「はい、さすがによく気が付きますね。私だったらこんな時まで気にかけられませんよ」
天野は感心しながら若干緊張気味に言った。
「兵法の基本だからな、常に気を配らないとこっちが殺られる。天野さんには悪いけど、出来るだけ協力してくれ」
「はい、信じてますから。六時間くらいしたら起こしてください。その後で白河さんが寝て、起きたらすぐに調べに行けば十分時間が取れます」
今は夜の九時だから確かに七時間はあまる計算になる。
「わかった、後は俺に任せろ」
「お願いします」
そう言うと天野はすぐに布団を敷いて寝入った。
彰は一メートルほど離れたところで座って神経を研ぎ澄ます。
二時間ほどたったとき、いきなり障子が斜めに切り裂かれ、いくつかのマントをまとった影が月光を背に踊り出る。
とっさに彰は敷布団をちゃぶ台返しの要領でひっくり返し、無理

やり天野を起こし刀を抜く。
「天野さん、敵だ！　早く起きろ！」
天野はいきなり宙に飛ばされ、床に叩きつけられる寸前で受身を取り、立ち上がると同時にぼそぼそと文句を言う。
「そんな乱暴にしなくたって、深い眠りになんてついていられるほど神経は太くないですよ」
もし、障子の近くに座っていたら、斬り殺されていた。
「俺は前を。天野さんは後ろにいる敵が襲ってきたら反撃してくれ、出来るだけ離れないように！」
「わかりました。新たに来た敵はいないようなので、余裕があったらサポートします」
マントをまとった七つの影は全員鬼の仮面をし、フードをかぶった奇妙な連中だった。
全員手には日本刀を二本持っていて、同じ型から同門だと推測できるが、まるで機械のように同じ運動能力で、周りを囲むように縦横無尽に部屋を駆け回る。
出来るだけ殺したくない、相手の出方を待って峰打ちで対処しよう。
「天野さん、動きに惑わされるなよ！　自分の前方および上空百八十度だけに意識を集中させるんだ！　今は助けは必要ない」
刹那、天野にのみターゲットを絞ったかのように一人、また一人とすれ違いざまに襲い掛かる。
「天野さん！」
「大丈夫です、余所見をしないで……きゃっ！」
天野は寸前のところで攻撃を逃れたが、すでに肩で息をし始めている。
「白河さん、気をつけてください！　中に時々すごい動きで変則的に攻撃してくる敵がいます！」
確かに、これだけの人数がいるわけだから、高レベルのリーダーがいる可能性は高い。

くそ、これ以上戦いが続くと不利だ。
すでに部屋は刀傷でいっぱいだ。
「天野さん、サポートよろしく！」
そう言うと、彰は散開する敵目掛けて突進し、気を刀にため、何度も空中を斬りつける。すると気は衝撃波となって敵を一掃する。
連続気功波だ。通常の気功波は、わずかな時間で回復するが、三百六十度上下左右の攻撃は半端の無い気を消費する。
これは一度打つと、新たに気を練るまでに無防備になり、一時的に普通の人間の力しか出ない危険な技だが、それを補う要因があるときは、不意打ちならほとんど敵を全滅させることが出来る。
思ったとおり、すごいスピードで避ける敵がいた。だが、予想通りにいったのはここまでだった。
敵は見方一人を盾にして避けながら、近くにいる仲間を彰の後ろに突き飛ばし、うまく二人を助け、彰の背後に飛び退いた。
「ここは私が対応します、白川さんは気を練ることだけに専念して下さい」
刹那、三人一斉に襲ってきたかと思うと、一列に並び始める。
「天野さん、逃げろ！」
彰は振り向きながら叫ぶが、天野は首を振る。
「だめです、少しなら食い止められますから」
その間にも、敵はすぐ近くまで迫り、天野に切りかかる。
すると、後ろの敵が天野の右前に出て、さらにその後ろの敵は宙を舞う。
彰はまだ気を練りきれていない。不用意に助けては自分がやられる可能性がある。敵も気が付いているようだった。
「手前の敵を倒せ！　あとは何とかする！」
天野は一瞬ためらったが、すぐに敵の刀を返し、足を切らせ、刀を奪い取る。
彰は、右前に踏み込み、敵を斬りつける。
すると、もう一人の敵はちょうど彰がいたところに刀を振り降し、

彰の活躍により動きが止まる。
「やはり反撃できない俺を殺して確実に無力化させる気だったか！」
そう言い終わる前に、彰は刀を反転させ、逆袈裟に振り向きながら斬る。
しかし、敵は一瞬早く刀を抜き、後退する。
彰も負けてはいない。気を練り終わり、さらに一歩踏み込みマントを切り裂いた。

## 6 二天一流の剣士（前書き）

彰の家に隠れることにした。
天野は意外にお嬢様のように品があり、立ち居振る舞いも大和撫子で、彰は自分では気がついてないが、徐々に好意を寄せる。

## 6二天一流の剣士

「ちいっやるな……」
敵はそう言うとマントを脱ぎ、仮面を外し円相の構えに転じる。
二振りの刀で攻めと守りに備える円相の構えは、対極をも包含した広大な心の構えと伝えられている。
「俺の名は桑原正樹。流派はあの宮本武蔵玄信（みやもとむさししんげん）が使う二天一流だ」
ご丁寧に流派まで教えた桑原はからかうというより楽しんでいるように見える。
「ずいぶん余裕だな、どんな術で強くなったのかは知らないが、気功術は使わないようだな」
「確かに飛騨守様に身体能力を向上させてもらったが、技もほかの兵より強いのも本来の能力があってのことだ。冥界への扉を開くため、脅威を滅するためにおまえらには死んでもらう！」
桑原は突進とともに右手の太刀で袈裟に切る。
すかさず彰は受け止めるが、もう一方の小太刀が胴を目掛けて突いてくる。
彰は後退し、今度は自分から袈裟切りを仕掛ける。
桑原は2本の刀を持ち上げ、受け止めると、太刀を突き出してくる。
あわやというところで彰は後退し、中段の構えで様子を見る。
この間わずか一秒。常人なら目で追うどころか残像しかわからないほどのスピードで、コンマ何秒出遅れれば死が待っている。
しかし敵は完璧な防御とカウンターでこちらの攻撃を退ける。
「私も手伝います！」
天野は彰の隣に出るが、彰はそれを手で静止する。
「これは漢と漢の一騎打ちだ。手を出さないでくれ」
「そんなこと言っている場合ですか！」
天野は怒鳴りつけんばかりの勢いで講義するが、彰はかたくなに

その態度を崩さない。
「もし危なくなったら助けてくれ、頼む」
天野は脱力して、呆れ顔で呟く。
「気をつけてくださいね、持久戦に持ち込まれれば持ち込まれるほど不利になりますから」
「わかっている、ありがとう」
そう言って彰は八双の構えに転じ、桑原を睨みつける。
「なかなかいい事言うじゃねえか、気に入ったぜ」
桑原は冷笑を浮かべる。
「なぜおまえは飛騨守に手を貸す！　」
「はっ何を言い出すかと思えば、くだらねぇ質問しやがって。そんなことは決まっているだろう、このふざけた世界を変えるためだ」
桑原は肩をすくめて答える。
「世界を変える？　滅ぼして作り直すのか！　」
「滅びるかどうかは問題じゃない。この平和な世界で甘ったれた奴らの気を引き締めてやるのさ。
弱ければ死ぬ。その時はその時、ただ戦国の世のように戦い続けたいだけだ」
「そんなことをして何になる！　人を殺して何が面白いんだ！？　」
「俺は剣でしか己の存在意義を見出せない。だからこそ、俺の力を見せ付けてやるんだ」
桑原は一気に間合いを詰め、二本同時に内側に向け斜めに切りつける。
彰は剣先で両側にはじくと同時に懐に入り、胸部に掌拳を浴びせる。
「剣は己の心身を鍛えるために今も存在しているんだ！　殺す必要はない！　」
桑原はすんでのところで避けると、刀を振り下ろし、威嚇する。
「剣は殺すために生まれた。活人剣こそ邪道だ！　」
そこで彰は思い出した。白河陰流の生まれたわけを、いつも

耳にたこが出来そうなほど言われたことを。
「陰流は殺人剣として生まれた。そしてその後、新陰流として伝えられたのは活人剣。
つまり新陰流を開いた上泉伊勢守綱(かみいずみいせもりつな)が、殺人剣は邪道だと説き、活人剣として生まれ変わらせた。
しかし殺人剣として残したものもいた。それが白河陰流だ。
そして陰流自体があまりにも高度な技で、気功術を使うものだけが使えるものとして伝えるようになった」
　彰は一歩後退したまま棒立ちになった。
「どうやら自分の剣にも同じような要素があることに気付いたようだな」
「だが、殺していい理由にはならない！　」
　彰は下段の構えで接近を試みる。
桑原は反論する。
「能力をフルに生かせる、大体もう何人か殺しているだろうが、そんな貴様にいえたことか！　」
　その一言に一瞬動きが止まるが、すぐに否定する。
「悪は止めなければならない！　できるだけ殺さないようにはしている」
　彰は逆袈裟に斬りつけるが、桑原はそれを小太刀で受け止め、太刀で頭を狙う。
「それが甘いというんだ！　」
　彰はそのまま体当たりして、桑原はバランスを崩し、彰はすかさず袈裟に斬る。
「生きようとするものの命を無理やり奪い取っていいのか？おまえに奪う資格があるのか！　」
　桑原は太刀を畳に突き刺し、バランスをとり飛び退いて攻撃を交わそうとするが、左腕を少し負傷する。
「お遊びが過ぎたようだな、次で決める！　」
　桑原は円相の構えから太刀を上段、小太刀を水平に構え、突

進してくる。
　二刀流との勝負は時間が掛かるほど不利になる。
例え相手が軽傷を負っていても油断は大敵だ。
彰は上段に構える
「これを使うのはおまえが始めてだ。対二刀流、白河陰流奥義”十文字”」
それを見た桑原は、動きを止める。
「むぅ……」
桑原は、ただならぬ雰囲気に気圧されたのか、様子を見るが、意を決して攻撃してくる。
　彰はすかさず太刀の来るであろう位置に刀を移動すると、そのまま桑原の肩めがけ襲いかかる。
桑原はそれを止めようと水平に構えた小太刀をぶつけようとするが、ぶつかる寸前に彰は左手を右袖に突っ込み、中から小太刀の一筋の光が見え、桑原の腕を斬る。そして、ひるんだ先にそのまま太刀を振り下ろす。
　あまりの複雑かつすばやい動きに天野はあ然となっていたが、桑原は状況を理解する前に絶命していた。
桑原の目は見開かれ、彰を空虚なまなざしで見上げていた。
さっきまで、互いに剣の生き様を説き合い、殺そうとしていた目、さっきまで必死に生きようとあがいていた目が。
　彰はいつも通り血抜きの動作をする。すると、本当に血糊が地面に飛び散る。
なるほど、実践の血抜きはこんな感じかと、妙に落ち着いていた。
おそらく興奮しているのだろう。感覚が研ぎ澄まされ、血が沸騰するようだ。
　彰は目をそらすようにきびすを返し、天野に問いかける。
「俺は間違っているのだろうか……？　」
天野は、今にも光を失いそうな目をした彰に微笑んで答える。
「あなたの言っていたことは間違ってない。剣は殺しの道具だけど、

弱い人を助けられないわけではないわ」
彰は一瞬目を伏せるが、すぐに「ありがとう」と、笑顔で答える。
「でもすごかったですね、今の技」
天野は彰の刀を見ながらそう言うと、彰は少しえばりぎみに答える。
「今の技は太刀を上段に構えることと、仕込み小太刀を使うこと意外は状況に合わせて放つタイミングや角度、場所を決める」
彰がえばるのも無理はない。それは優れた戦闘センスと能力、判断力が要求され、そんな真似ができるものなど気功術が使える者でもほとんどいないからだ。
「これからどうする？　」
ここがばれた限り、長居は無用だ。だが、それを待っているとも考えられる。裏を考えればきりがないが、慎重にいくならあえて動かず、敵の動きを見るしかない。
「そうですね、計画通りに動いても最終的にはあまり変わらないと思いますよ」
天野も同じ意見のようで、結局このままここで一夜を明かすことになった。
そして翌日。
彰と天野は、打ち合わせ通りに図書館で歴史書をあさっていた。
「天野さん、そっちはどうだった？　」
天野は、本を読んだままの体勢でぴたりと止まった。。。
「気道口！」
天野は叫ぶ。
飛騨守は、気道口を東西南北支配して、盤石を作り、世界の気功の力を我が物とすると考えられる。
バシュ！
「なに！？」
彰は驚きの声を上げる。
天を貫く光が現れた。気道口が制圧された。

「しまった！　おそかったか……」
天野は彰に一番近い南で待ち伏せしようと提案。後を追って後手に回るわけにはいかない。
ガサッ
天野が物音に振り向くと、本が落ちていた。ちょうどさっき読んだ書物である。
「すみません、すぐもどします」
「そんなのあとでいいから、早く」
「す、すみません……え？　」
天野はそのまま硬直する。
「どうした？　」
「いえ、何も」
二人は足早にそこを去った。

## 7黒幕、現る（前書き）

襲撃してきた敵は、桑原正樹という二刀流の使い手だった。見事これを撃退した彰たち。
天野と彰は、図書館で過去に同じような事件がないか調べることに。
翌日図書館で歴史書をあさっていたとき、気口道は制圧されてしまった。

## 7黒幕、現る

最後の気道口はさびれた神社の祠(ほこら)だった。山道が意外と広く、戦いにはうってつけかもしれない。

辺り一面、満開の桜が風に揺られ蕭々（しょうしょう）と咲いている。

決戦の舞台にはちょうど良い。そう思ってるとまもなく神社の屋根から声がした。

「む……？　部下を倒したのは貴様らだな？　」

飛騨守だ。彰は堅い表情で答える。

「そうだ。飛騨守、お前も同じ運命にある」

飛騨守は笑っている。

「気功術を使えぬ貴様らがか？　」

「残念だな。その術は破った」

飛騨守の笑みはきえない。むしろ、小馬鹿にしてる感すらある。

「残念なのは貴様らだ。ヤツは俺ほどの力は無い。千里眼の術を使って観戦させてもらった。気功術に頼り過ぎているってわけではないが、俺の封印術を使えば貴様はただの剣士だ。

妖術と愛州陰流、業物の刀であるこの竜王丸をもってすれば俺の勝ちだ。逃げるなら今だぞ？　ククク……」

飛騨守の笑みの正体はわかった。しかし、退くわけにはいかない。

「貴様の名はなんという？　」

「俺が白河彰。彼女が天野香澄だ。冥土の土産か？　」

飛騨守は苦笑する。

「ふっ……そのようなものだ。しかし冥土に逝くのは貴様らだがな。戦いの間だけは覚えておこう」

「勝負だ！　」

しかし、やはり彰は丹田から気が出ない。

「どうした？　ここまでジャンプしてみろ」

「くっ……この！　やぁ！　」
彰は必死に掛け声を上げるが、数十センチしかジャンプできない。しかし、当然神社の屋根には登れない。その間に斬り殺される。
それに、柱をよじ登ったところで、気功術を使えぬ上に、敵はあの死闘を繰り広げた桑原の心を掴んだ男。勝てる道理が無かった。
一歩間違ったら父の二の前だ。
（どうする……？　）
「解！　」
突然天野の声がすると、身体に気が循環し始める。
法術抑制を解除したのだ。
「いつのまにそんな技を！？　」
飛騨守より先に彰が問う。
「図書館で落とした本に書いてあって、以前習ったことを思い出したのです。このくらいの抑止力ならかき消します。力押し……ってことですね」
「……ふっおもしろい。剣術でも俺の方が優れてるってことを証明するまでだ」
「業物の刀に気を巡らせカマイタチのような風を起こせば、さながらチェーンソー！　おまえの刀など、たたき壊してくれる！　」
彰は不敵な笑みを浮かべる。
「普段使ってる刀は業物月下だ。そう、これだよ。おまえと同じ業物。俺も気が使える。さて、どちらがどの程度かは、剣術で示せるって訳だ」
彰はそうそう、とつぶやいて続ける。
「飛騨守、おまえの目的は何だ？　この世をその手に収める気か？　」
飛騨守は盛大に笑って語る。
「その通り。東西南北の気流を自分の元に貯め、最強の力を得る。闇の王の力を召還する！　」
飛騨守はこれ以上何も語る気はなく、彰もまた聞く気はない。

飛騨守が叫び、仕掛ける。
「無駄話はこれまでだ。勝負！」
飛騨守は上段の構えで袈裟に斬る。
彰は下段の構えで防ぎつつ、半身になって八双の構えで迎え撃つ。
しかし、飛騨守は脇構えで彰の月下を下方にはじく。
「くっ……なんてスキの無い攻撃！」
気功剣術家同士の戦いは、つまるところ先手の読み合いに左右される。
彰がやられないのは、読み合いと、戦法や型にある。受け手の剣は、攻め手の剣に重さが乗るのに先んじてその軌道を封じる。
それにからめ取られまいと、すぐに攻め手もまた型を変える。
こうして両者の剣が猛スピードで交わされ、一瞬の油断が死を招く。
彰はまだ使ったことの無い最強奥義、”迅雷突”を使いたいが、それどころか上段の構えすらかなわない。
「加勢します！」
天野は助走からジャンプし、空中で回転して、かかと落としをする。
当然飛騨守は袈裟に斬ったままの姿勢であるから、下段の構えから逆袈裟に斬りかかる。
天野はそれを見越して、気功波を放ち牽制する。しかし、飛騨守は当たるすんでの所で同じく気功波を放ちかき消す。
彰はそれをみて、上段に構えようとするが、飛騨守は彰の腹を蹴り、吹っ飛ばす。
飛騨守の技は、ただ完成されているわけではない。
先を読む戦闘センスもある。あまりにそれがずば抜けていて、桑原のような有名な流派とか、業物の刀とかはついでにしかないことを思い知る。
しかし、思い知るだけでは何の事象の打破にもならない。
天野は着地し、すかさず回し蹴りをする。冷静な天野が、こ

こまで大技を繰り出すのはほかでもない、危機感である。
にもかかわらず、ここまで飛騨守に立ち向かえるのは天野にも人並み外れた胆力があるということだ。
気功術師とて万能ではない。刀対肉体など、普通は考えられない。ましてや相手は業物の上に気功術である。こちらが鉄の身体だとしても斬られる。
剣で防御すると言うことは、攻撃対象は刃にその身をさらすことになる。危険な戦いだ。
「あまいわ、このアマ！　」
飛騨守は彰を蹴り飛ばしたばかりで刀を構えることはできないが、再び気功波を放って天野を吹き飛ばす。
「きゃっ！」
「さがってろ、天野！　」
彰も頭に血が上って、天野を”さん”付けすることすら忘れている。
あまりに圧倒的な力の差を前に、二人は命の危機を感じ、焦燥に駆られているのである。それは動物的直感だ。
「はい、すみません！　」
しかし、天野は素直に彰の言うことを聞いた。それだけ自分の参戦する意味の無さを知ったのだろう。素手で刀を振り回す相手に勝つには、自分より力の劣る相手というのが常識だ。
「させるか！気功竜王丸！　」
「きゃぁ！　」
飛騨守は、左手をかざして手から竜の形をした気を放った。突然のことに対処できなかった天野の腹を気功竜王丸が直撃し、天野は失神する。
「天野！　」
彰が天野に近づこうとすると、飛騨守は右手から気功竜王丸を放ち、邪魔をする。
彰は驚愕する。

「闇の竜の力を得ていたのか！？　」
「貴様らが待ち伏せしている好きに、闇の軍勢の力から、竜の力に昇華したのさ。二つの気道口を制圧してな。ま、二つ目の気道口を制圧する前に間に合ったかは疑問だから、策としては待ち伏せの方が良かったかもな」
　彰は舌打ちする。
「ちっ……お前ほどの腕の持ち主が、なぜ悪の道に走る！？　」
「……はっ！　俺が悪で、貴様が正義か？　ならば聞こう。正義とはなんだ？　悪とはなんだ！？　貴様等のような利己主義に俺はならん！　」
「正義とは……？　俺が利己主義？　利他主義ではなく？　」
　飛騨守の剣からは嘘は伝わってこない。本心だ。
　飛騨守は、上段の構えから袈裟に斬り、彰が鋒に左掌を当て、刀身を受け止めるのを確認して気功竜王丸を放つ。
「双頭竜王丸！　」
　飛騨守が技名を叫ぶと同時に彰が吹っ飛び、倒れる。刀と気功の両の竜王丸による攻撃。
「がはっ！？　」
　気功竜王丸が胸に直撃し、彰は一時心停止した。
　気功術は、肌にはほとんどダメージを与えず内蔵を喰らう。
　素人目からしたら、ただの気功拳法家より、鍛え抜かれた空手家の方が強そうに見えるが、肉体を鍛え抜いた力より、精神を鍛え抜いた力の方が強い。
　同じ一撃必殺でも、気功竜王丸のそれは想像を絶する強さである。二人が一命をとりとめたのは、身体を覆う気の鎧のおかげだった。
　しかし、それも終わりである。今、まさにとどめをさされる状態だからだ。
「悪い、貴様の名前は忘れた」
　飛騨守は笑いながら言い、刀を振りかざす。
『貴様等のような利己主義に俺はならん！　』

死を前にして、飛騨守の言葉がよぎる。
（正義とは……？　俺が利己主義？利他主義ではなく？　）
利己主義。自分の思う所が正しいという勘違いなのか……？　俺が間違ってるから倒されるのか？
親父……どっちが正しいかわらないよ……
『あなたの言ってることは間違ってない。剣は殺しの道具だけど、弱い人を助けられないわけではないわ』
そう……だ……弱い人を助ける。飛騨守の支配下に善良な市民を置いてはいけない。
俺は……。
「俺は！　間違ってない！　」

## 8決戦（前書き）

黒幕、飛騨守を待ち伏せした彰たち。飛騨守は予想を遥かに超える力を持つ。
天野は気絶し、彰は一撃で倒されたと思った時、それは起こった。

## 8 決戦

「むう……！？　」
飛騨守が剣を構えて彰の前に立った時、それは起こった。
　彰は振り下ろされるはずの竜王丸から逃れ、起き上がりざまに飛騨守を蹴り上げる。
一瞬気絶した天野は、すぐに彰に気功術”烈”をかけたのだ。
彰は能力アップし、飛騨守の攻撃を回避。
（天野さんの術でパワーアップした！？　）
丹田から経絡、手足に走る三陰三腸十二経……全身六百五十七箇所全ての経穴から力が湧き出てくる……！
飛騨守の頭上を飛び越え、後ろから抜刀術！
飛騨守は腕を少し切られる。
続いて二撃目……。
「やるかよ！　」
双頭竜王丸で牽制（けんせい）、回避。
　「闇の王の力だと！？　この俺でさえ闇の竜がせいいっぱいなんだぞ！　」
飛騨守はいきなり形勢逆転され、焦った。
「私の魂の三分の一を削りました」
「そうか！　寿命を縮めて贄（にえ）として王を召還したのか！　ちぃっ……」
「お前！　そんな禁術を！？　」
「二人の命が取られるか……一人の寿命が縮む”だけ”か……考えるまでもありません」
　「しかし……」
「好きな人が傷つく姿をみたくはありません！　」
「俺を……ありがとう！　絶対勝つ！　」
　「この術は、もって一分半……解ける前に、早く！　」

飛騨守は当然の疑問を口にした。
「しかし、なぜ妖術でしか召喚できぬ闇の王を……」
天野はにやりと笑って答える。
「蛇の技は蛇ってね……ただ一つ、気功術でも召喚はできるのよ……そもそも、あなただって元人間で妖術使ってるし」
「だがしかし！　貴様らもこの技は恐らく初めて！　そこに突破口があるはず！」
飛騨守は気功竜王丸で攻撃するが、彰は剣圧でかき消す。
業物月下は、気を充満させ、大業物のそれとなった。
飛騨守、攻撃を防御したら刀を折られ殺られると思い彰から間合いをとる。
飛騨守は、生まれて初めて追いつめられる。生まれて初めて恐怖する。こんな戦い、悪い冗談としか思えない。
「死ならもろともー！　多重竜王丸！」
竜王丸十本が天野を狙う！
「それぞれが意志を持って動く！　よけられるか！？　その禁術を使ってから動いていない……動けないんだろう！？」
（なに！？　俺だってこの術のことはよくわからない……もし本当なら……！）
「かまわない！　敵を討って！」
「くっ！」
「死ねぃ！」
「させるか～！」
彰の慟哭がこだまする。
気功竜王丸は、亜音速の域に達して初速を二段階……つまり、五本一組に変え、片方の組が予想しうる回避先をも標的にしつつ、片方の組が弾道の合間を縫うように湾曲した軌道で彰の眉間、喉、心臓に各大動脈を狙う。
虚実入り乱れるその竜は、見切ろうと注視すればするほどに、逆に幻惑されて回避し損なう。

彰は気を前方放射状に放つ。十本が一瞬動きを止めた隙に月下だけで討つ。
その隙に彰はさらに追いすがる。
極限まで高まる気。一刹那よりわずかな六徳の間、気功竜王丸よりなお細い虚の瞬間ーー彰は間に合った。
飛騨守は世にも恐ろしい物を見るように驚愕する。
「バカな！？　」
すでに動体視力以前の問題である。彰には何が見えているのだろうか……？
亜音速で奔(はし)る気功竜王丸を倒すのに大きな動作は必要ない。迫り来る殺気のつぶてを、月下の切っ先で切り裂く。
五つ、六つと続いて殺気のつぶては発せられるがことごとくを打ち払いながら、一秒の内に、しかも彰はその場から動かずにかき消した。
飛騨守は確かに死力を尽くした。だがしかし、ついさっき彰を一撃で地に伏せた気功竜王丸は、十本あっても、百本あっても同じであるというように破壊尽くされる。
しかし、飛騨守は十本が限界である。千本など出せないし、そもそも千本で足りるか？
接近戦は彰の方が速い。刀も大業物月下。刀は木っ端みじんだ。やはり間合いをとって多重竜王丸を……
しかし、このような闘いを幾千やろうと、その先には死、あるのみ。
「早く飛騨守の元へ！　このままでは時間を稼がれてしまう」
天野の声が静寂を破る。そうだ。天野を守りながら戦えば、時間切れを狙える。
ここは天野を盾に……と模索する飛騨守。
「しかし……」
「あと十七秒！　」
「わかった！　死ぬなよ！　」

しかし、飛騨守の活路は絶えられた。
　とにかく飛騨守は、多重竜王丸でまた十本出した。
多重竜王丸のうち一本を足場にし、次の多重竜王丸を飛んでよけ、続く次の手を回転して肩幅のヒットゾーンを外してさらによける。
怒りの刃は止まらない。むしろ速度は上がり、超音速へ。
「あと十五秒！」
よけられた多重竜王丸が彰の背中に襲いかかる。
（当たった！）
飛騨守が確信すると、彰は爆転をして気功竜王丸を蹴り落とす。
「なに！？　背中に目でも付いてるのか！　化け物め！」
飛騨守は青くなって叫ぶ。
彰は、体の周りに微弱な気を放ち、気配を気で感じていた。イルカの超音波のそれだ。
あと十秒……
三本が天野を狙う
最後の竜王丸の動きが一瞬止まった。鬼神のごとく疾風する彰に、敵は脅えて動きが止まったのだ。
九秒……
　自分を超えるはずのない者が目の前に今。
「……そんなばかな！？　ちっくしょー！」
五秒！
飛騨守の見せた初めての”守り”
　彰は丹田で気を練り込んだ月下を上段の構えに取る。気息を巡らせ、導引の呼吸に入る。
しかし、その先はまるで違った。
刀を鞘に収め、上段に構える。
抜刀術を純粋に極めた一撃は、雷のごとく速い。鞘が敵の刀に当たった瞬間、鞘から光が落ちる。空気を裂き、そして、会心の突きを浴びせる。
敵の刀を鞘で受け止め、敵の刀と自分の鞘のぶつかった摩擦と抜

刀の速さで刀を抜き、突きを決める。
”迅雷突”、ここに極めり。
鋼が砕かれ、骨が割れ、裂かれる筋肉。全ての感触を感じる。
彰は飛騨守を、業物竜王丸ごと斬った。
飛騨守は、突然光が落ちて次には心の臓が突き抜かれていたことしかわからなかった。
飛騨守も、守りに入らず双頭竜王丸をだせば、あるいは時間切れを狙うこともできただろうに。。。
守りに入った瞬間負けたのだ。
「この俺ですら識らない……識らないぞ、そんな技！」
しかし、飛騨守の気功竜王丸もまた、天野に当たった。
「キャー！」
飛騨守、にやける。
「殺った！　……ガハッ……」
残り二秒で術が解けた。
「天野！」
「勝手に殺さないでよ……なんとか、よけたわ……ぐっ……かすった」
飛騨守は俄然（がぜん）とする
「な……ん……で……っ……」
剣鬼は今倒された。口から血の泡を吹き、身体の芯から冷気がにじみ広がるさまが、血溜まりとともに見てとれる。
痛みはもはや麻痺し、細胞の死が身体を蝕むように広がる。まるで身体の内外を隔てるものが消えたように、体温が外気と調和してゆく。
春の夕の刻は、死体には少々寒すぎる。風に吹かれ、散漫と散る桜。
花の海に呑み込まれ、飛騨守の身体は闇の竜に喰われて消滅してゆく。。。
彰はいつも通り血抜きしたが、そこにはもう情緒が無く、今後

することはないだろうと思った。
「飛騨守、残念ね……この術は一度使ったら動けるの。他の法術は使えないけど。敵を騙すなら味方から……白河さん、ご……」
「天野……！　」
大丈夫か……！？　と、走って向かう。疲れと緊張の糸のほつれで気絶したんだ。。。
考えてみれば、言葉を使った時点で口は動いてた。それに気がついただけでもどっと疲れが出た。
翌日、師匠である父の御前。
「また、人を殺してしまった」
天野は、彰を一瞥（いちべつ）して言う
「あれはもはや人ではないわ。鬼よ」
（ならば、その鬼を超える術を使ったお前は閻魔（えんま）か？　）
（……それは言うまい。その術が俺を助けた）
彰は月下を手に思う。この一刀が、俺が追い求めた……いや、一族が追い求めていた悲願の奥義をものにしたとは、今も信じられない。彰は失笑した。
これが剣の理（ことわり）というなら、かつての修行は何だったのだろう。死地で開眼した技。師である父、亮ならきっと、邪法と言うだろう。
対戦相手の死をもって会得した技。
復讐の剣鬼となって振るった技。
いずれは己自身をも食う鬼道の技と。
「例え今の力で使えても、金輪際、迅雷突は使えないな……」
またいつ敵が現れるかわからない。しかし、今は休息を……。
二人は、夕焼けの中流れ星に平和を祈る。一番星を見つけ、肩を寄せ合う。
――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

———
Enjoy MLB with MAJOR. JP! Ichiro, Matsuzaka, Matsui, and more!
——0—20201872221—1225108851=:8849 6
Content—Type: text/html; charset=iso—2022—jp

「むう……！？」

飛騨守が剣を構えて彰の前に立った時、それは起こった。

彰は振り下ろされるはずの竜王丸から逃れ、起き上がりざまに飛騨守を蹴り上げる。

一瞬気絶した天野は、すぐに彰に気功術”烈”をかけたのだ。

彰は能力アップし、飛騨守の攻撃を回避。

（天野さんの術でパワーアップした！？）

丹田から経絡、手足に走る三陰三腸十二経……全身六百五十七箇所全ての経穴から力が湧き出てくる……！

飛騨守の頭上を飛び越え、後ろから抜刀術！

飛騨守は腕を少し切られる。

続いて二撃目……。

「やるかよ！」

双頭竜王丸で牽制（けんせい）、回避。「闇の王の力だと！？　この俺でさえ闇の竜がせいいっぱいなんだぞ！」

飛騨守はいきなり形勢逆転され、焦った。

「私の魂の三分の一を削りました」

「そうか！　寿命を縮めて贄（にえ）として王を召還したのか！　ちぃっ……」

「お前！　そんな禁術を！？」

「二人の命が取られるか……一人の寿命が縮む”だけ”か……考え

るまでもありません」　「しかし……」
「好きな人が傷つく姿をみたくはありません！　」
「俺を……ありがとう！　絶対勝つ！　」　「この術は、もって一分半……解ける前に、早く！　」
飛騨守は当然の疑問を口にした。
「しかし、なぜ妖術でしか召喚できぬ闇の王を……」
天野はにやりと笑って答える。
「蛇の技は蛇ってね……ただ一つ、気功術でも召喚はできるのよ……そもそも、あなただって元人間で妖術使ってるし」
「だがしかし！　貴様らもこの技は恐らく初めて！　そこに突破口があるはず！　」　飛騨守は気功竜王丸で攻撃するが、彰は剣圧でかき消す。
業物月下は、気を充満させ、大業物のそれとなった。
飛騨守、攻撃を防御したら刀を折られ殺られると思い彰から間合いをとる。　飛騨守は、生まれて初めて追いつめられる。生まれて初めて恐怖する。こんな戦い、悪い冗談としか思えない。
「死ならもろともー！　多重竜王丸！　」
竜王丸十本が天野を狙う！
「それぞれが意志を持って動く！　よけられるか！？　その禁術を使ってから動いていない……動けないんだろう！？　」　（なに！？　俺だってこの術のことはよくわからない……もし本当なら……！　）
「かまわない！　敵を討って！　」
「くっ！　」
「死ねぃ！　」
「させるか～！　」
彰の慟哭がこだまする。
気功竜王丸は、亜音速の域に達して初速を二段階……つまり、五本一組に変え、片方の組が予想しうる回避先をも標的にしつつ、片方の組が弾道の合間を縫うように湾曲した軌道で彰の眉間、喉、心

臓に各大動脈を狙う。
虚実入り乱れるその竜は、見切ろうと注視すればするほどに、逆に幻惑されて回避し損なう。
彰は気を前方放射状に放つ。十本が一瞬動きを止めた隙に月下だけで討つ。　その隙に彰はさらに追いすがる。
極限まで高まる気。一刹那よりわずかな六徳の間、気功竜王丸よりなお細い虚の瞬間ーー彰は間に合った。
飛騨守は世にも恐ろしい物を見るように驚愕する。
「バカな！？　」
すでに動体視力以前の問題である。彰には何が見えているのだろうか……？
亜音速で奔(はし)る気功竜王丸を倒すのに大きな動作は必要ない。迫り来る殺気のつぶてを、月下の切っ先で切り裂く。
五つ、六つと続いて殺気のつぶては発せられるがことごとくを打ち払いながら、一秒の内に、しかも彰はその場から動かずにかき消した。
飛騨守は確かに死力を尽くした。だがしかし、ついさっき彰を一撃で地に伏せた気功竜王丸は、十本あっても、百本あっても同じであるというように破壊尽くされる。
しかし、飛騨守は十本が限界である。千本など出せないし、そもそも千本で足りるか？
接近戦は彰の方が速い。刀も大業物月下。刀は木っ端みじんだ。やはり間合いをとって多重竜王丸を……
しかし、このような闘いを幾千やろうと、その先には死、あるのみ。　「早く飛騨守の元へ！　このままでは時間を稼がれてしまう」
天野の声が静寂を破る。そうだ。天野を守りながら戦えば、時間切れを狙える。
ここは天野を盾に……と模索する飛騨守。
「しかし……」

「あと十七秒！」
「わかった！　死ぬなよ！」
しかし、飛騨守の活路は絶えられた。　とにかく飛騨守は、多重竜王丸でまた十本出した。
多重竜王丸のうち一本を足場にし、次の多重竜王丸を飛んでよけ、続く次の手を回転して肩幅のヒットゾーンを外してさらによける。
怒りの刃は止まらない。むしろ速度は上がり、超音速へ。
「あと十五秒！」
よけられた多重竜王丸が彰の背中に襲いかかる。
（当たった！）
飛騨守が確信すると、彰は爆転をして気功竜王丸を蹴り落とす。
「なに！？　背中に目でも付いてるのか！　化け物め！」
飛騨守は青くなって叫ぶ。
彰は、体の周りに微弱な気を放ち、気配を気で感じていた。イルカの超音波のそれだ。
あと十秒……
三本が天野を狙う
最後の竜王丸の動きが一瞬止まった。鬼神のごとく疾風する彰に、敵は脅えて動きが止まったのだ。
九秒……　自分を超えるはずのない者が目の前に今。
「……そんなばかな！？　ちっくしょー！」
五秒！
飛騨守の見せた初めての”守り”　彰は丹田で気を練り込んだ月下を上段の構えに取る。気息を巡らせ、導引の呼吸に入る。
しかし、その先はまるで違った。
刀を鞘に収め、上段に構える。
抜刀術を純粋に極めた一撃は、雷のごとく速い。鞘が敵の刀に当たった瞬間、鞘から光が落ちる。空気を裂き、そして、会心の突きを浴びせる。
敵の刀を鞘で受け止め、敵の刀と自分の鞘のぶつかった摩擦と抜

刀の速さで刀を抜き、突きを決める。
”迅雷突”、ここに極めり。　鋼が砕かれ、骨が割れ、裂かれる筋肉。全ての感触を感じる。
彰は飛騨守を、業物竜王丸ごと斬った。
飛騨守は、突然光が落ちて次には心の臓が突き抜かれていたことしかわからなかった。　飛騨守も、守りに入らず双頭竜王丸をだせば、あるいは時間切れを狙うこともできただろうに。。。
守りに入った瞬間負けたのだ。　「この俺ですら識らない……識らないぞ、そんな技！」
しかし、飛騨守の気功竜王丸もまた、天野に当たった。
「キャー！　」
飛騨守、にやける。
「殺った！　……ガハッ……」
残り二秒で術が解けた。　「天野！　」
「勝手に殺さないでよ……なんとか、よけたわ……ぐっ……かすった」
飛騨守は俄然（がぜん）とする
「な……ん……で……っ……」
剣鬼は今倒された。口から血の泡を吹き、身体の芯から冷気がにじみ広がるさまが、血溜まりとともに見てとれる。
 　痛みはもはや麻痺し、細胞の死が身体を蝕むように広がる。まるで身体の内外を隔てるものが消えたように、体温が外気と調和してゆく。
春の夕の刻は、死体には少々寒すぎる。風に吹かれ、散漫と散る桜。
花の海に呑み込まれ、飛騨守の身体は闇の竜に喰われて消滅してゆく。。。
 　彰はいつも通り血抜きしたが、そこにはもう情緒が無く、今後することはないだろうと思った。　「飛騨守、残念ね……この術は一度使ったら動けるの。他の法術は使えないけ

ど。敵を騙すなら味方から……白河さん、ご……」
「天野……！　」
大丈夫か……！？　と、走って向かう。疲れと緊張の糸のほつれで気絶したんだ。。。
考えてみれば、言葉を使った時点で口は動いてた。それに気がついただけでもどっと疲れが出た。　翌日、師匠である父の御前。
「また、人を殺してしまった」
天野は、彰を一瞥（いちべつ）して言う
「あれはもはや人ではないわ。鬼よ」
（ならば、その鬼を超える術を使ったお前は閻魔（えんま）か？　）
（……それは言うまい。その術が俺を助けた）
彰は月下を手に思う。この一刀が、俺が追い求めた……いや、一族が追い求めていた悲願の奥義をものにしたとは、今も信じられない。彰は失笑した。
これが剣の理（ことわり）というなら、かつての修行は何だったのだろう。死地で開眼した技。師である父、亮ならきっと、邪法と言うだろう。
対戦相手の死をもって会得した技。
復讐の剣鬼となって振るった技。
いずれは己自身をも食う鬼道の技と。
「例え今の力で使えても、金輪際、迅雷突は使えないな……」
またいつ敵が現れるかわからない。しかし、今は休息を……。
二人は、夕焼けの中流れ星に平和を祈る。一番星を見つけ、肩を寄せ合う。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3723f/

夕焼けに散る花

2010年10月9日01時34分発行